

国立国語研究所学術情報リポジトリ

研究成果のまとめ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002710

研究成果のまとめ

村田 年（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター）

山崎 誠（国立国語研究所）

要旨

現代書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の文章資料を対象に、慣用句、複合動詞を指標として、テキスト中に現れる句や語の分布がジャンルによって異なることを明らかにした。具体的な研究成果は以下の二つである。一つは、慣用句を指標とした分析である。BCCWJの書籍コーパス中、ジャンルが明示的なテキスト9種を「人文科学系」「社会科学系」「自然科学系」の三つに分類し、「手」のつく慣用句74を指標として正準判別分析を行った。その結果、判別に有効な5つの慣用句が選択され、三つのジャンルが明確に分離された。もう一つは、BCCWJ書籍コーパスの中の、自然科学系ジャンルのテキストにおける複合動詞の後項動詞の使用傾向の分析である。選択した26後項動詞を指標として調査した結果、「だす」「こむ」「つける」「あげる」「あう」によって構成される複合動詞の使用が全体の50%以上を占めていることがわかった。この調査結果を踏まえ、上記5語を含む複合動詞のテキストにおける具体的な使用例を、意味特徴から分類し、さらに結合する名詞をまとめて提示することによって専門日本語教育の現場に資するデータを提供した。

キーワード：

テキスト、ジャンル、現代日本語書き言葉均衡コーパス、BCCWJ、慣用句、複合動詞、後項動詞、判別分析、専門日本語教育

本プロジェクトの研究成果を以下の通り、発表した。

1. 村田年・山崎誠（2011）「「手」の慣用句を指標とした文章のジャンル判別—現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター第39号
2. 村田年・山崎誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター第40号

以下に転載する。